

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月31日現在

機関番号：24501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520657

研究課題名（和文） 反奴隷制運動の国際ネットワークにみる近代的「人権」・「人種」概念の成立と変容

研究課題名（英文） The Emergence of the modern concept of 'humanity' and 'race' in the international network of the anti-slavery

研究代表者

中沢 葉子（並河 葉子）(NAKAZAWA YOKO) (NAMIKAWA YOKO)

神戸市外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：10295743

研究成果の概要（和文）：18世紀末から19世紀にかけてイギリスをはじめとして欧米諸国では、どのような権利意識、人権概念の変化がみられたのかについて、反奴隷制運動を手掛かりに研究した。結果、階層として凝集しつつあったミドル・クラスの人びとが特有の価値観を普遍化しようと展開した反奴隷制運動をはじめとする様々な社会改良運動を通して、とくに大西洋をまたいだ奴隷制廃止運動は、19世紀半ばをもって終息していくが、この運動の中で形成されてきた新たな価値観はその後ミッション活動などのかたちで奴隷制度が欧米以外にも拡大していき、近代的価値観のベースとして世界的に受容されていく。本研究はそのプロセスの一端を明らかにしようとするものである。

研究成果の概要（英文）：This research consider the emergence and the dissemination of the new modern sense of humanity and the concept of 'race' through the international Anti-slavery network from the second half of the 18<sup>th</sup> century to the mid-19th century.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：世界史

キーワード：人権、人種、ジェンダー、家族、奴隷制

## 1. 研究開始当初の背景

2007年のイギリスにおける奴隷貿易廃止200周年をきっかけに、奴隷制度や反奴隷制運動の再検証の動きが活発になってきた。これまで奴隷制度に関連する研究では扱われたことのない文学や美術作品、奴隷自身の日記などが新たな研究史料として活用されるようになり、奴隷の社会的位置づけや生活な

どについての分析が進展している。また、奴隷たちの多様性、つまり、成人男性の奴隷だけでなく、奴隷の子どもや女性たちの法的な位置づけ、日常その他についての研究、反奴隷制運動への奴隷自身の関わりとその影響などについても検証されるようになり、奴隷制度の具体的な像が明らかになりつつある。奴隷制及び反奴隷制運動についてはその要

因をめぐり、経済的背景と人道的背景の側面から分析されてきたが、上記のような研究の進展を受けて、両者が相互にどのように影響し合っていたのか、具体的な社会変動に結び付けて解明が進んでいる。

ただし、反奴隷制運動が、18世紀後半からイギリスのみならず、ヨーロッパ同時進行で展開したことは、それぞれの地域の運動についての個別の研究にもかかわらず、近年の研究は特定の個人や特定農園の史料に寄与したものが多く。

先行研究はしばしば、各国で展開していた運動相互の関連や、担い手の国際的なネットワーク、及び、他の社会改良運動との思想的、人的つながりについて示唆しているが、具体的な検証はこれからである。本研究が明らかにしようとするもののひとつはこの点である。

また本研究にいたるまでに、筆者は反奴隷制運動の経済的要因と人道的要因との接点を様々な角度から検証してきた。運動の実態については、イギリスにおける反奴隷制運動の司令塔としての役割を果たしていたクラバム派の分析を軸に、クラバム派のメンバーと近い立場にいた女性たちのかかわりについても考察を進めてきた。同時に、18世紀末から進められた、イギリスにおける一連のモラル・リフォームとの関連についての研究などから、当時の社会変革にともない、社会的に階層として凝集しつつあった新興ミドル・クラスのライフ・スタイルの変化が道徳観の変化をもたらしたことが反奴隷制運動の動向にも大きな影響を与えたのではないかと考えるにいたった。

19世紀をつうじて人びとが「人種」をどのように認識していたのかについての研究からは、奴隷解放が現実のものとなったころから「人種」概念が徐々に固定化していったこと、制度としての奴隷解放と同時に、実態としての人種間の隔離が北米やイギリスなど多くの地域で進行していった事実が浮き彫りになった。

以上を踏まえ、現代的な価値規範では絶対的「悪」とされる奴隷制など、身体的拘束に対する価値規範が18世紀半ばから19世紀にかけてのこの時期決定的に変化した可能性があると考えに至った。この時期に人道主義的概念が変化したことについては、リン・ハントなども指摘している。

現代社会で普遍的かつ絶対的な規範である「人権」、および社会制度や社会問題の根本に横たわる「人種」や「ジェンダー」という概念が、18世紀半ばころから19世紀にかけて社会の重要な構成概念として成立し、社会に広く受容されるプロセスを具体的に明らかにするためには、反奴隷制運動を多面的に検

証しなおすことが有効であると判断し、本研究を構想した。

## 2. 研究の目的

反奴隷制運動は、当時の多様な社会運動のほとんどすべてと相互に密接なかかわりを持ち、イギリス、フランス、アメリカという国際的なネットワークを維持しながら18世紀末から19世紀以上にもわたって展開された。奴隷制度をめぐる反対派、擁護派双方の論点の変容、運動の社会的位置づけ、運動にかかわった人々の社会的背景などは、近代的なモラル・コードの成立、普遍化の過程を如実に反映すると考えられる。

本研究では、18世紀末から19世紀半ばにかけて、①近代的な人権概念および人種概念がどのように成立したのかについて、反奴隷制運動を軸に、その周辺に展開したさまざまな社会運動も加えて考察することが目的である。

それまで許容されていた奴隷制度が、ある時期を境に非人道的なもの、あるいは容認しがたいものとされるようになったのは何によるものか、従来の経済的な理由や人道主義的側面からの反奴隷制運動の展開についての説明ではなく、価値観そのものの変容、それがどのような過程を経て起きたものなのか、また他のどのような社会変化を反映しているのかなどについて明らかにすることが目的である。

②さらに、この反奴隷制運動に関与した人びとは他の社会改革運動にも積極的にかかわっている。とりわけ、「文明化の使命」をスローガンとして海外の社会改良事業にも積極的にかかわっている。そうした多方面の運動との関連から、当時の社会における価値観の転換全般について検討し、アジア、アフリカなどにおいて、運動の担い手が提示した新しい価値観がどのように受容されたのかまた、こうした運動のなかで「人種」観の変化がどのように運動の在り方に影響していたのかについても再考した。

## 3. 研究の方法

・基本的にはクラバム派のメンバーの活動を検証の基本としており、クラークソンやウィルバーフォース、ハナ・モアの書簡類の分析を行った。使用した史料は、主としてAdams and Mathew Publicationが反奴隷制史料としてマイクロフィルムの形で公刊しているものである。また、同時に後述するように、反奴隷制運動とかかわりの深い海外伝道活動や内外聖書協会、初等学校教育を推進するための内外学校協会、国民協会などの史料も合わせて使用した。

書簡類の分析から得られた知見について

は、その意義や解釈について以下のプロジェクト参加者や関連分野の研究者と意見交換しながら、検討をさらに進めた。

・反奴隷制運動については、近年ロンドン大学を中心に、奴隷貿易商たちが与えた文化的・社会的インパクトについて具体的に検証しようというプロジェクトがキャスリーン・ホールなどを新たに立ちあげられている。このプロジェクトは当該研究と関連が深いので、当該プロジェクトが主催するシンポジウムに参加するなどして、意見交換を行ってきた。とくにイングランドにおける反奴隷制運動において主導的な役割を果たしたクラバム派については、近年研究が急速に深まってきており、プロジェクト参加者の注目も高い。このため、クラバムの教会にて数度にわたる現地調査を行うとともに、クラバム教会などが有する文献の調査などもおこない、教会を軸としたコミュニティのあり方からクラバム派のメンバーの活動についての考察を行った。

・とくに非ヨーロッパ世界における新しい価値観の受容については、アフリカ人のディアスポラ研究を行うロンドン大学のシーハン教授と意見交換しながら、インド、アジア地域についての分析を行っており、これについてはさらなる発展的研究に向けて検証を継続している。

#### 4. 研究成果

本研究の具体的な成果としては、以下の6点があげられる。

(1) イギリスにおける反奴隷制運動のイデオロギー形成に女性たちが果たした役割と、運動への具体的な関わりについては、3月に開催された神戸市外大英国研究センター主催の研究会において「反奴隷制運動と女性たち」とのタイトルで報告を行った。ミドル・クラスとして凝集しつつあった層の中でも女性たちが持つ特有の家族観、価値観が反奴隷制運動において、彼女たち独自の「家族観」の普及という意義を見だし、この層の多くの女性の積極的な運動への関与を促したというのが報告の主旨である。本報告では、彼女たちの主張する「自由」の概念についての考察が不十分であったので、現在その点についてさらに詳細を検証した論考を執筆中である。

(2) 宗教観、道徳観の変化がどのように運動に影響したのかについての研究を進める中で、イギリス宗教関係の研究者たちと共同で『イギリス宗教史』の訳出にも取り組んだ。

この訳出作業に当たっては、当該研究の主な対象となっている、新興ミドル・クラス層の中心としてのクラバム派やその後継世代の思想を反映させた教会建築や都市計画などについての詳細な記録を参考にすることが必要であったため、ロンドンにおける現地調査の成果を反映させることができた。この研究を通して、当時のイギリス社会における宗教の位置づけを再検討し、反奴隷制運動をはじめとする一連の社会改良運動における宗教の影響について、論考にまとめることができた。

(3) 反奴隷制運動と同時に展開した価値観の変化を迫るため、この時期、保護されるべき対象とされていた「女性」や「子ども」の社会的な位置づけの変化についても考察した。

Fass が編集した『子ども学事典』の関連項目の邦訳にも編集者として参画し、最新の知見を紹介する事業にも携わることができ、また、本研究にも成果を反映させることができた。

(4) 反奴隷制運動は、他の社会改良事業との重なりが顕著である。とりわけ、この運動の参加者たちが積極的に関与した海外伝道事業及び初等教育普及事業には、彼らの家族観や人種観、道徳観が色濃く反映されている。本研究の成果に基づき、2011年にはイェール大学にて開催されたミッション研究イェール・エディンバラグループの年次大会において、アジア地域における伝道事業でこうした価値観がどのように反映されていたのかについて報告を行った。

また、成果の一部は、2009年に刊行された、女性宣教師たちの書簡集の解説にも反映されている。

また、2012年4月に韓国の梨花女子大学で開催されたアジア世界史協会の大会において、成果の一部として明治期の日本におけるミッションの教育事業にみられる家族観についての報告を行った。

初等学校教育、海外伝道協会の事業、反奴隷制運動のスローガンに共通しているのは、「正しい家庭」の形成と、そのベースとしての正しい「道徳規範」の必要性である。従来は、この「正しい道徳規範」について、「キリスト教的モラル」という言葉が頻出することや、海外においてはキリスト教伝道協会が初等教育を担う事例についての検証を併用していたことから、「キリスト教教育」という側面が強調されがちであった。しかしながら、イングランドを中心として、国内外で展開された社会改良運動のほとんどは、当時社会的に発言力を増してきたものの、いまだに政治的な発言力が限られていた非国教徒を含むミドル・クラスが主体となっていたことの意

味を再検討した。結果として、彼らにとっての「キリスト教的価値規範」とは、イングランド社会の対立軸としての国教徒対非国教徒という枠組みを前提とした発言、発想であることの意味を無視してはならない。彼ら非国教徒を含むリベラルな新興ミドル・クラスの言う正しいキリスト教的価値規範とは、保守的な「国教会」的キリスト教観とは違う、より自由な道德規範を指していたことに注目すべきであり、こうした宗教観を持って彼らはこれまで社会の中で正式な位置づけを得られなかった宗教的マイノリティや奴隷たち、さらには海外の人びととの連携も視野に入れた新しい理想の社会創設を考えていたのであるとの結論を得た。

このような宗教観が、人種観の変容とどのような関係にあったのか、また、人種観の変容のなかで宗教観はどのように変化していったのかについては次の(5)に述べる今後の研究の中でさらに詳しく検討を加えていく。

(5) 反奴隷制運動の非欧米世界への影響については、ロンドン大学のシーハン教授と共同研究を行ってきたが、反奴隷制運動の国際ネットワークのアジア、アフリカへのインパクトについては、現在も現在も分析を継続中であり、アフリカン・ディアスポラの一貫という視点および、19世紀半ば以後の世界的な近代化の同時進行に付随する社会変化という観点から、さらに踏み込んだ研究として発展させることで合意している。

(6) 「自由」を絶対的善ととらえる価値観の形成途上で、奴隷制度のような身体的束縛をともなう諸制度については絶対的「悪」とされるようになり、制度として許容されなくなっていくが、このプロセスについて、具体的に検証するというのが、本研究の最終的な目標のひとつである。これについては、奴隷解放と私有財産権の相克を解決するための様々な方策について、近年研究の進展が著しい個別の事例研究を前提として、新しい価値観形成のプロセスについて成果を現在まとめているところである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計7件)

1. 「クラバム派 その形成と後世への影響」、社会経済史学会 近畿部会、2009年11月21日、神戸学院大学

2. 「クラバム派—理念と後世への影響—」、名古屋近代イギリス研究会、2010年3月6日、名古屋市立大学

3 「反奴隷制運動と女性たち」、神戸市外国語大学英国研究センター研究会、2011年3月30日、神戸学園都市 UNITY

4. 'The introduction of the modern family ideal to Japan by female missionaries to Japan in the second half of the 19<sup>th</sup> century', Yale-Edinburgh Group on the History of the Mission Movement and World Christianity, 29<sup>th</sup> June, 2011, Yale University

5 「イギリスにおける初等学校教育と聖書教育」、比較教育史研究会春季大会、3月25日、お茶の水女子大学

6 「イギリスにおける初等学校教育と聖書教育—初等学校教育の組織化と宗教—」、神戸市外国語大学研究班研究会、3月30日、神戸市外国語大学英国研究センター

7 "The Christian Missionary Activities and the Emergence of the Modern Family Idea in Early Meiji", the 2<sup>nd</sup> Congress of the Asian Association of World Historians, Ewha Womans University, Seoul, 28<sup>th</sup>, April, 2012.

〔図書〕(計2件)

(1) *Japan as Seen by British Women in Christian Mission*, Edition Synapse, 2009.

(2) 並河葉子、「19世紀イギリスの初等学校教育と宗教—文化的バリアをめぐる攻防—」、光永雅明編著、『文化的多様性のイギリス史(仮題)』昭和堂、近刊予定。

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

中沢 葉子（並河 葉子）  
(NAKAZAWA YOKO) (NAMIKAWA YOKO)  
神戸市外国語大学・外国語学部・准教授  
研究者番号：10295743

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし